小松市那谷町桃の木山１号窯

県営公害防除（カドミ）特別土地改良事業に係る
緊急発掘調査概報

１９７９・３

石川県教育委員会

例　　言

1. 本書は、県営公害防除特別土地改良事業―梯川流域地区―の実施に伴ない石川県教育委員会が小松市教育委員会の協力を得て実施した緊急発掘調査報告書である。調査費用は石川県農林水産部耕地整備課が負担した。

2. 調査期日　着手　昭和53年10月2日

　　完了　昭和54年3月31日

　（但し現場調査は昭和53年11月22日に完了）

3　調査員　　広岡　公夫　富山大学理学部教授

　　小村　　茂　小松市教育委員会社会教育課主事

　　宮下　幸夫　小松市教育委員会社会教育課主事

　　高橋　　裕　石川県教育委員会文化財保護課主事

4. 調査補助員　田島　正和

5. 本調査の実施にあたっては、小松市教育委員会、小松市那谷町有志、石川県小松土地改良事務所の多大な協力をいただいた。ここに厚く感謝の意を表します。

6. 本書の写真撮影、図版作成、原稿執筆、編集は、宮下幸夫があたった。

小松市那谷町桃の木山１号窯

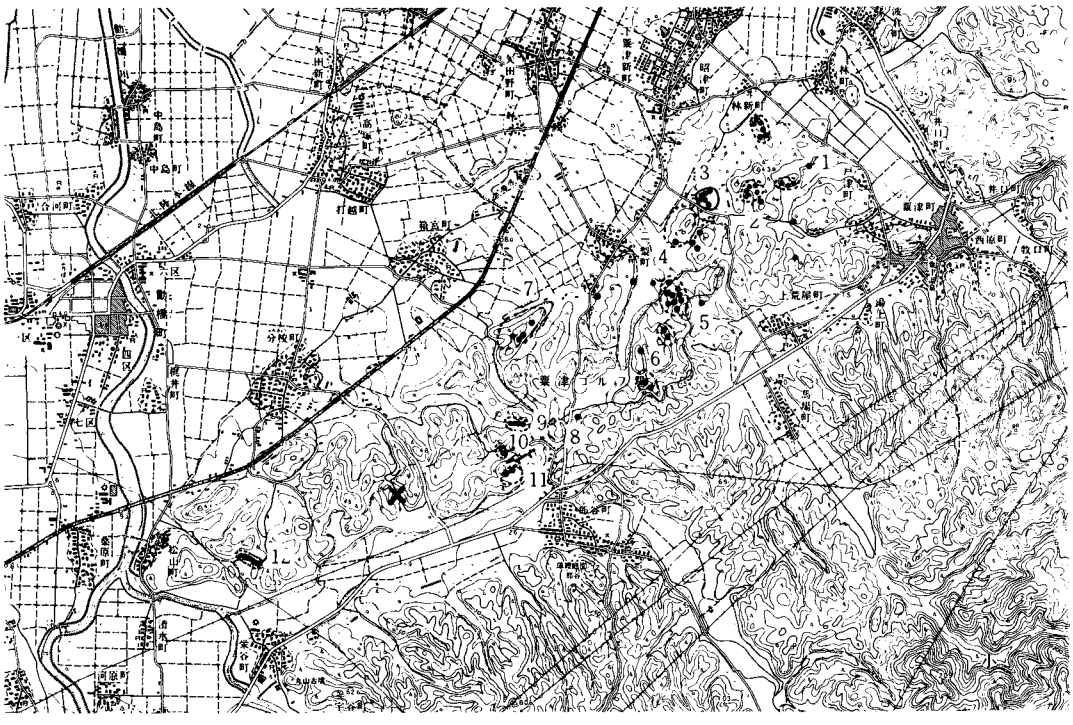
Ⅰ　位置と環境

本古窯跡は、小松市那谷町通称桃の木山に所在し、南加賀古窯跡群に含まれる窯跡である。

南加賀古窯跡群は、小松市南部の林町より加賀市松山町にかけて、幅（南北）1 km で、長さ（東西）5 km の帯状に伸びている標高 40～50 mの低い丘陵上に形成されている。

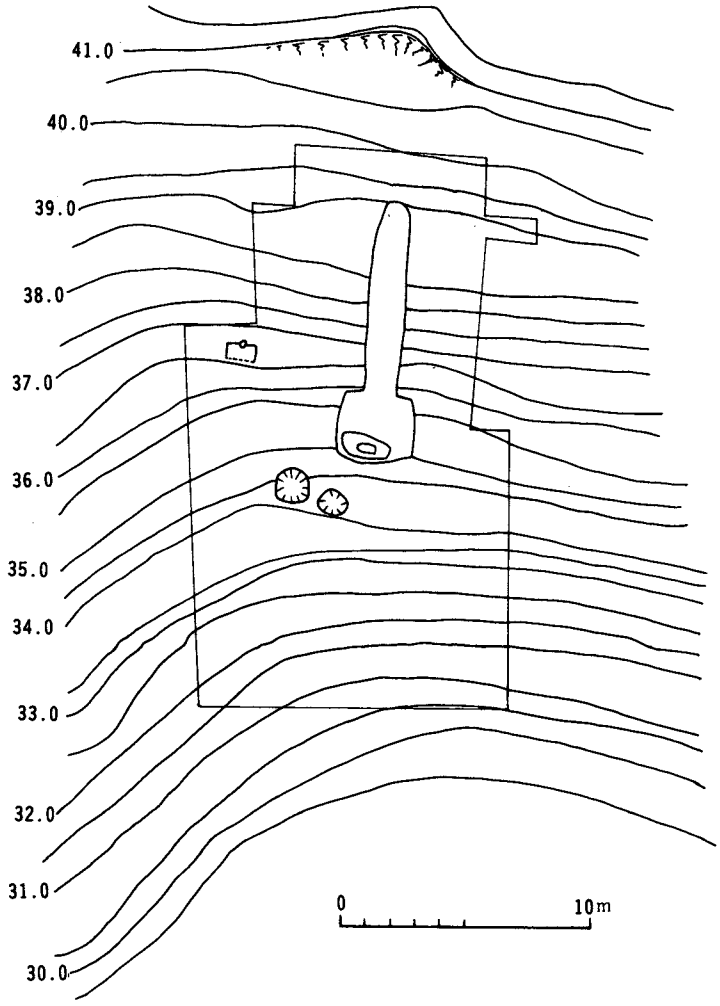
現在、この丘陵を横切って、那谷町より分校町に至る県道があり、この県道に交叉して那谷川が西流している。この那谷川が、那谷・分校線と交わる地点より北西にひときわ目立つ小谷がある。この小谷の開口部に立つ山が桃の木山であり、窯はこの丘陵の東斜面に位置している。

南加賀古窯跡群の中で、本古窯跡が所在する付近は、小松市と加賀市の市境であり、分布調査等の立ちおくれで、窯跡分布上、空白域となっていた地帯である。桃の木山では、昭和52年に試



第１図　南加賀古窯跡群主要窯跡分布図

× 桃の木山１号窯跡（奈良）
1 戸津５号窯跡（平安）
2 六字ヶ丘古窯址群（平安）
3 一貫山古窯址群（奈良末～平安）
4 豆岡山古窯址群
5 二ツ梨古窯址群（仮称）
6 奥谷１号窯跡（平安末～鎌倉前）
7 箱宮古窯跡群（奈良・中世）
8 那谷１号窯跡（鎌倉）
9 小天王谷古窯址群（鎌倉）
10 大天王谷古窯址群（鎌倉）
11 カミヤ古窯址群（鎌倉）
12 分校古窯址群（古墳）



第2図　地 形 測 量 図

掘調査を行なったが、本窯の他に、窯の存在が認められなかった。しかし、付近では、若干の遺物が採集されているので、窯跡の存在が想定される。

付近の遺跡としては、南西約1km に、古墳時代後期の分校古窯址群、北東約1km には、奈良時代より中世期の箱宮古窯址群が位置していて、本古窯跡は、そのほぼ中間に存在する。窯跡以外の遺跡としては、北西約500 mに、方格規矩四神鏡を出土した1号墳を盟主とする分校カン山古墳群を中心に、約40基の古墳からなる分校古墳群が所在する。

II 調査経過

1 分布調査

昭和52年度に小松市梯川流域のカドミウム汚染田の土地改良事業が実施されることになり、水田客土用の土砂採取場に、小松市那谷町地内通称桃の木山が選定された。この計画決定を知った小松市教育委員会社会教育課より石川県教育委員会文化財保護課に対し、土砂採取予定地内に古窯跡が所在するとの連絡があり、文化財保護課では直ちに現地を確認した。灰原部分から多量の須恵器片が採取され、当該地に奈良時代の古窯跡が所在することを確認し、石川県農林水産部耕地整備課との間でその取り扱いについて協議した。

その結果、当該古窯跡部分は昭和53年度に採取する計画で、昭和52年度では、当該地の北に続く斜面を採取するとのことであったため、北側及び東側について分布・試掘調査を実施し、他の窯跡の所在の有無を調査することになった。

昭和52年9月19日から9月23日まで、延5日間にわたりトレンチ法により試掘調査を実施したが、調査地区には、灰原等古窯跡の存在を暗示するような所見は得られず、当該土砂採取予定地内には古窯跡1基だけが所在するとの結論に達し、再度、耕地整備課との間で協議した結果、昭和53年度に緊急調査を実施し、記録保存を図ることで双方が合意した。

2 1号窯発掘調査

昭和53年度に入り、文化財保護課と耕地整備課では、土砂採取の進行状況に合わせ協議し、発掘調査は10月2日より開始した。以下、その経過を発掘日誌で追って見る。

10月2日　ブドウ柵撤去。トレンチ設定。

3日　トレンチ掘り下げ、灰層の範囲を確認

4日　上方にトレンチを設け、掘り下げた結果、地山の落ち込みプランを確認。

5日　地山落ち込みを掘り下げたが、ロート状になっているため中断する。

6日　焚口部側壁を検出した。この追求を行なう。

7日　焚口部に炭化木材を検出。窯体を窯尻方に追求。

8日～14日　窯体追求、上部の土量が多く難行する。

17日　窯体右側の縦セクションを図取り。窯はくりぬきと判明、窯上部を覆う地山を削る。また、先日の地山の落ち込みは、煙道部の掘り方と判明したので、窯体追求のため、セクションベルトを残して掘り下げる。

18日～11月1日　窯体上部の地山を壁の残存高まで排土する。また、窯内の埋土を除去する。更に、窯体周辺を拡張し、掘り下げる。

20日　窯体左側でカマド状遺構を検出。床面より須恵器、塗彩土器片出土。

23日　本日より灰原の掘り下げを開始する。

25日　煙道部セクションの図取り、後、掘り下げる。

11月1日　カマド状遺構の写真撮影。平面図、セクション図取り。

2日　窯底近くまで排土終わる。前庭部の掘り下げを開始する。

4日　窯底清掃。焼成部右側に土師器甕が到立した状態で出土する。その他、須恵器片が床面上に多く残っていた。また、燃焼部から焼成部にかけて、天井部のアーチ形が良く遺っていたが、排土の途中で、土圧のため崩壊した。

6日　窯底清掃継続。焚口部の炭化木材は、立ったままのものを3本検出した。

7日　窯体の写真撮影。平面図、断面図の実測を行なう。床面遺物取り上げ。

8日　実測継続。前庭部の掘り下げ。また、焚口部床面下（約40cm）に、もう一枚の床面を検出した。これを第1次窯とし、上のものを第2次窯とする。

10日　前庭部に第1次窯から続く土坑状遺構を検出、この掘り下げを行なう。また、前庭部の土坑、ピット等を検出した。

11日　前庭部の掘り下げを継続。

13日　富山大学広岡先生により、考古地磁気の資料採集。

16日　第2次窯の床面をとりはらい、第1次窯を追求する。その結果、第1次窯の崩れた窯壁ブロックで埋め、黄褐色粘質土（地山）を貼り第2次床としていることが判明した。また、第2次窯は第1次窯より、幅を広げていた。焼成部上部は、第2次窯の時に再使用していた。前庭部では、右側に焚口より排水溝が掘られていた。また、この排水溝より後に4個のピットが穿たれたことが判明し、前庭部分に覆屋の存在したことを想定された。

18日　第1次窯、前庭部の写真撮影、図取りを行なう。

20日　富山大学広岡先生、第1次床の考古地磁気資料採集。

22日　図取りを終了し、器材撤収。

III　遺　　構

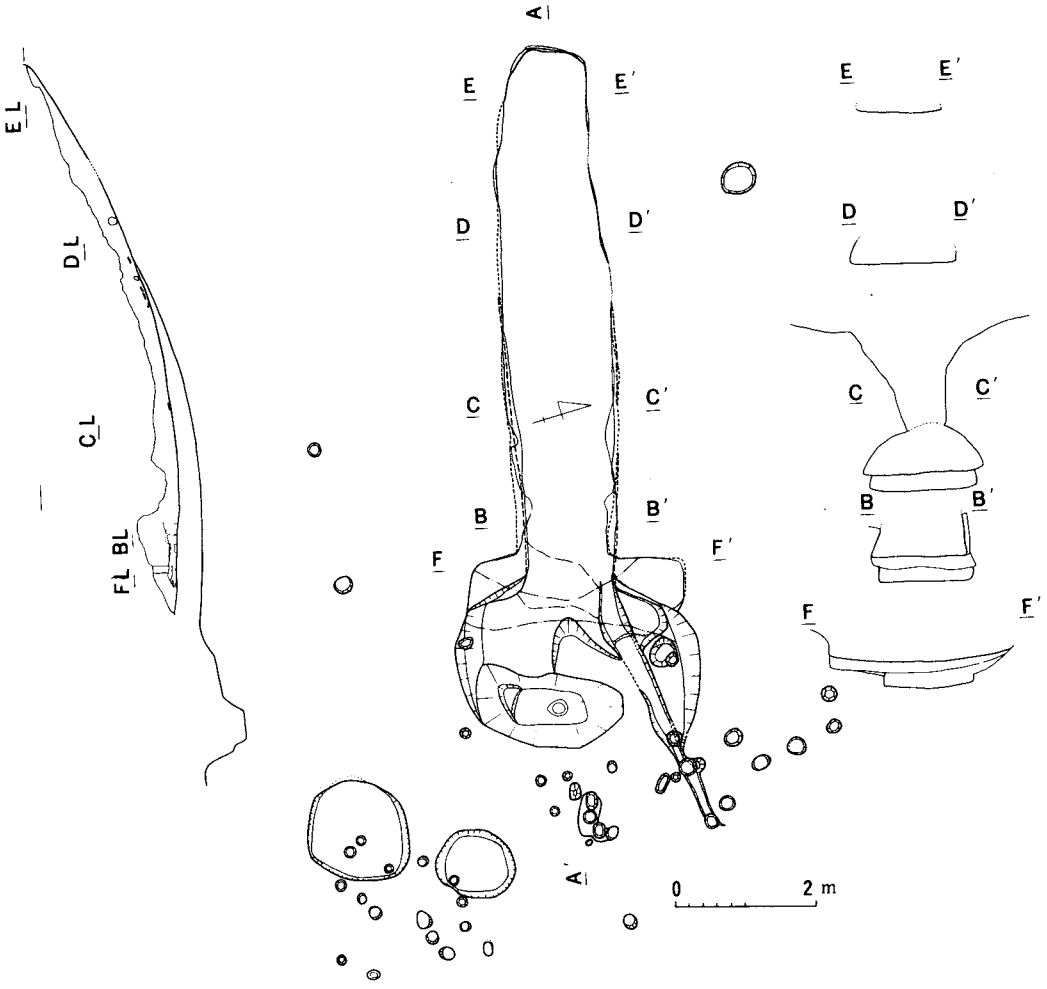
今回の発掘調査では、1基の窯とカマド状遺構、2基の土坑を検出した。

遺跡は、南加賀古窯跡群の南西部に位置していて、戦後にブドウ畑として開墾されている。調査の結果、相当に土が削平され、移動していたが、窯体は深かったので影響は受けていなく、灰原が若干削られていたにすぎなかった。

以下、その遺構の構造、規模等の概略を述べたい。

1　号　窯（第3図）

窯体は、等高線に直交して構築されていて、主軸方位はN—75°—Wを測る。窯尻で、現地表よ



第3図　桃の木山1号窯実測図

り窯底まで2.8 mの深さを測り、焚口よりくりぬいて構築した地下式の無階無段登窯である。天井部は、すでに、ほとんど陥没していたが、焼成部下方の部分で比較的良く残存していて、高さはこの部位で約70cm と復原できた。

窯体は、大きく分けて2回の使用が認められた。つまり、1次焼成後に、焚口部で約40cm の厚さで、崩れた天井や側壁をつめてかさ上げし、更に、やや幅を広げる修復、改造を行なっていた。焼成部上方、窯尻より3 mまでの床は2次焼成時に再度使用している。

(1)　1　次　窯

長さ8.0 m、幅は前庭部で1.9 m、焚口部で1.25 m、焼成部最大幅1.6 mを測る。床面の傾斜は、焚口・燃焼部はほぼ水平で、焼成部は約20度であった。

焚口右側より前庭右側にかけては、幅20cm、深さ15cmの溝が掘られていたが、おそらくこれは排水溝であろう。また、前庭部中央には2.1 m×1.1 mの長方形プランで、深さ90cmの土坑状遺構が認められた。これは、残灰処理のために設けられたものであろうと考えられる。

(2) 2 次 窯

前述のように、1次窯の床を崩れた窯壁で埋め、地山の黄褐色粘質土を貼って2次床としている。長さ7.5 m、幅は前庭部で2.5 m、焚口部で1.35 m、焼成部最大幅は1次窯と同じで1.6 mを測る。1次窯より焚口部を50cm奥に設け、やや幅を広げている。床面は焚口より約1.6 mまではやや下降していて、傾斜は焼成部下方で10～15度、上方で約20度であった。

煙道は残っていなかったが、その掘り方が検出された。それは、長径3 m、短径2 mの楕円形の平面プランで、それより円錘形に掘り下げて窯体に至っている。

焚口部には、炭化木材が6本遺存していて、しかも、3本は立ったままの状態で残っていた。これらは、最終焼成時にとり残されたものと思われ、ほぼ原位置と考えられる。太さは10～15cm、長さ80～90cmであった。

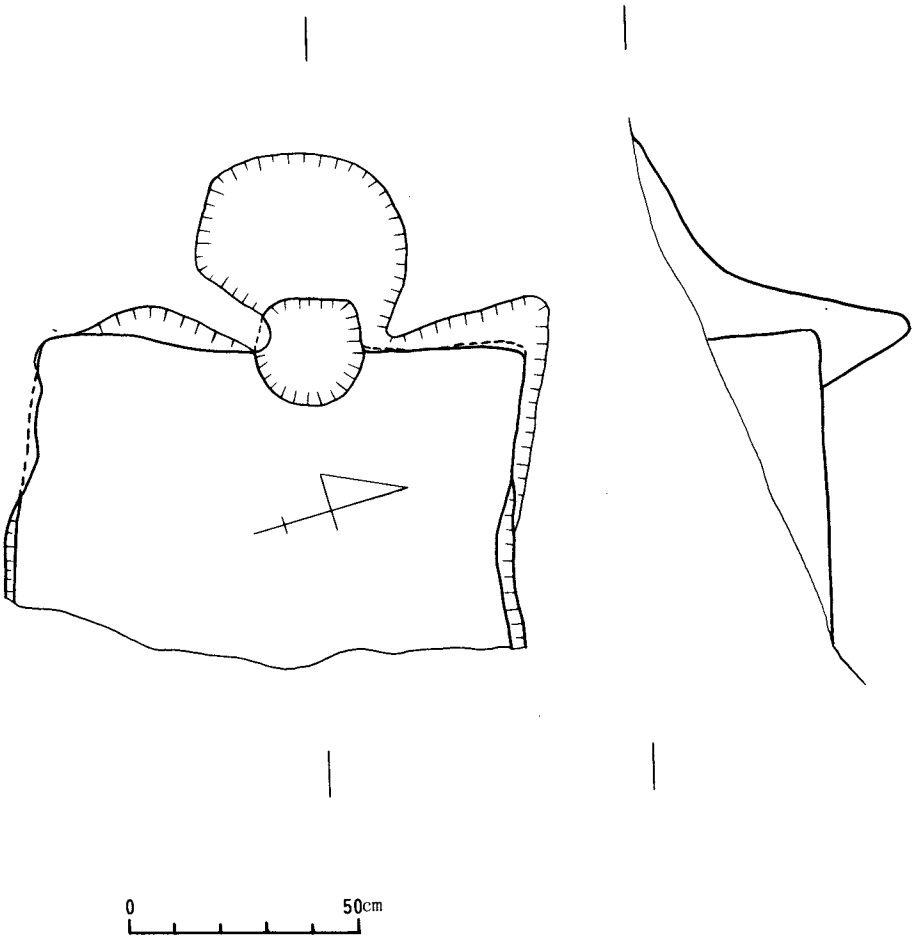
前庭部は、1次窯の溝や、土坑状遺構は埋めて、そのあとに径15～20cmのピット4個が穿たれていた。これにより、前庭部より焚口にかけて、覆屋があったと思われる。

カマド状遺構（第4図）

1号窯の南側に並行して築かれていた。平面形は、南北105～110cm、東西60～70cmの長方形状を呈している。西壁部分で、地山を23cm掘り下げていて、床面は水平であった。壁、床面とも焼けていて、遺存度は良好であった。西壁のほぼ中央に径23cmのロート状のピットが穿たれていたが、このピットの中は焼けていなかった。

遺構の床面中央より塗彩土器片が若干検出された。このことにより、この遺構の特殊性があるようにも考えられる。しかし、性格は不明であり、その形態よりカマド状遺構と仮称している次第である。

その他、前庭部には、土坑が2基検出された。1号土坑は1.2×1.0 mの楕円形プラン、2号土坑は径1.5 mであった。1号土坑の壁は一部焼けていた。更に前庭部には、径15～20cmのピットが多数認められたが、柱穴としてまとまったものは、前述の覆屋のもの以外は検出されなかった。



第4図　カマド状遺構実測図

Ⅳ　出土遺物

今回の調査における出土遺物は、坏、蓋、甕、壺、瓶、甑、その他であり、個体数では坏、蓋が多い。その他に、土師器甕が1点、塗彩土器片が数点出土している。(図版Ⅴ～Ⅷ)

長頸瓶（1）

昭和52年9月の試掘調査の時、1号窯の東側斜面より出土したものである。頸部及び底部を欠失している。焼成はやや悪い。肩部に明瞭な稜をのこし、頸部にかけてはやや丸味をもっている。

土師器甕（2）

焼成部の上方右側床面に到立した状態で出土したものである。口縁部と胴部の一部が欠けているだけの完形品である。胎土は砂粒を多く含む。口縁はゆるく外反し、底部は丸底である。外面の口縁部から胴部にかけて、一部ススが付着している。胴部下半は磨耗がはげしい。

蓋（3～10）

3～7は同一タイプの蓋である。口縁部端を内側におりまげており、外側に稜が出来る。内側には返りはない。口縁先端からなだらかにのび、肩に明瞭な稜をなさない。つまみは、扁平な宝珠つまみである。器外面に淡緑色の自然釉がかぶっている。6は焼き歪みがはげしいが、同じタイプである。口径14.5～15.7cm、高さ3.0～3.8cm。

8は口径16.5cm、高さ2.6cmで、口縁部端にあまり明瞭な稜をなさない。また、肩にも認められず、扁平な形態である。

9は口径14.4cm、高さは復原で3.5cmである。口縁部端及び肩部には稜はなく、天井より丸みをもって、なだらかに先ぼそりの口縁端にいたる。つまみは欠失している。今までに確認されたことのないタイプである。

10は口径12.5cm、高さ4.3cmである。ややいびつであるが薬壺の蓋のように、平坦な天井部から屈折して、垂直に近い口縁部を形造っているものである。焼成は良好である。

その他としては、小破片ではあるが口縁部内側に返りのあるものが出土している。

坏（11～20）

坏は高台が付くもの（11～15）と付かないもの（16～20）とに分けられる。

11は口径16.5cm、器高4.4cmである。色は茶褐色を呈し、焼成は不良である。口縁部はゆるく外反し、内外面とも横ナデを行なっている。高台及び底部は磨耗している。

12は口径14.5cm、器高5.2cmである。比較的高い貼高台より直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反している。内面は緑色の降灰釉でおおわれている。外面は巻き上げ痕をとどめていて、高台の立ち上がり部に指頭による調整が行なわれている。胎土はやや粗く、焼成は普通である。

13は口径16.1cm、器高4.6cmである。貼高台よりゆるく立ち上がり、口縁部は外反する。内面は横ナデを行なっているが、巻き上げ痕をとどめている。胎土はやや粗い。

14は口径14.7cm、器高4.0cmである。外へ張り立す貼高台よりゆるく立ち上がり、口縁部でやや外反する。胎土はあまり砂粒は含んでいない良好なもので、焼成も堅緻である。

15は口径14.8cm、器高3.6cmである。外へ張り出した低い貼高台より、更に横に大きく張り出し、口縁部で外反する。内外面とも入念な横ナデを行なっている。胎土は緻密で、焼成は堅緻である。

16は口径13.3cm、器高3.6cmである。底部からゆるく立ち上がる。口縁部外面が黒灰色をなしていて、重ね焼きの痕跡がうかがえる。胎土は砂粒をわずかに含むが精製されている。

17は口径13.2cm、器高3.5cmである。外傾度は16より小さい。器内外面とも横ナデを行なっているが、底部に巻き上げ痕を残している。胎土は16と同じであるが、焼成はあまり良くない。

18はいびつである。口径16～17cm、器高5.5～6cmの大形である。内面に緑灰色の降灰釉が厚く覆っている。底部よりゆるく立ち上がり、口縁部は外反する。外面は横ナデを行なっていて、底部も入念に調整をされている。また、底部に蓋片が付着している。

19は口径13.5cm、器高4.2cmである。ほぼ直線的な底部よりゆるく立ち上がり、口縁部でやや外反する。内外面とも良く横ナデを行なっているが、巻き上げ痕は残っている。底部も入念な調整を行なっている。胎土は若干砂粒を含むが、緻密であり、焼成は普通である。

20は口径13.2cm、器高4.5cmである。19と共に窯体南側の地山直上より出土したものである。手法等も19と同様である。

長頸瓶（21・22）

21は頸部のほそい長頸瓶である。頸部のみであり、22は胴部のみである。長頸瓶はこの他に、1よりも肩から頸部にかけて、直線的なもの等がある。

双耳瓶（23）

口径18cmを計り、頸部外面に植物の茎状のものによると思われる二条の沈線が施されている。下部を欠失して頸部のみであるが、器形は双耳瓶と思われる。

短頸壺（24）

第1次窯の床より出土したもので、口径13.5cmを計る。胎土は緻密で良好なものである。

25は口径24～25cmを計る大形の壺である。内外面ともにタタキを施している。焼成はやや不良である。

26は口径15cm、高さ6cmを計るもので、肥厚した底部より、湾曲しながら立ち上がり、口縁部でするどく外反する。口縁部外面に波状文が施され、頸部にはヘラ先でつけたと思われる刺突文がめぐっている。また、底部外面立ち上がり部分には火ダスキがみられる。内底は巻き上げ痕が残っている。用途、名称は不明である。

スリ鉢（27）

口径16.2cm、高さ14cmである。内面は入念な横ナデを行なっている。底部の外縁に繩目状の押印がみられ、それは外底部にもわずかに認められる。焼成途中のためか灰白色を呈している。胎土は精製されている。

28は、径13.5cmの円板状のもので、中央に5つの円孔が穿たれている。甑の落とし蓋と考えているが、断定はできない。

V まとめ

桃の木山1号窯は、南加賀古窯跡群に含まれ、その南西部に位置する丘陵の東斜面に構築されていた。その構造は、地下式無階無段登窯であった。構築方法は、焚口部分よりくりぬいて作り、煙道部は地山よりロート状に掘り、窯体に達した後、煙り出しを構築したものであった。

1号窯は、大きく改造を行なっている。1次窯は全長8.0m、最大幅1.6mで、傾斜は約20度であった。この1次窯を約40cmかさ上げし、焚口部、燃焼部をやや拡幅して、焚口部を50cm窯尻方に設けているため、2次窯は全長7.5mと短くなっている。焼成部上方は再度使用しているので、燃焼部から焼成部下方の傾斜はゆるくなっていて、10～15度を測る。1次床・2次床の

出土遺物、また、灰原のそれをみても、その時間的な差異はほとんど認められず、ほぼ連続的に改造、使用したものと思われる。その他、1次・2次窯とも部分的に修復がみられた。

2次窯の焚口部分には、焚木の燃え残りが、ほぼ原位置に遺存していた。それによると、焚木を燃やす時には、ただ焚口に入れるだけではなく燃えやすいように、あるものは立てて入れていた。また、焚木は10～15cm の太さのもので、長さは80～90cm であった。つまり、焚木は割って使用したのではなく、丸太のままであった。このことは、焼成の最終段階では、温度を持続させるために必要なことであったのだろうと思われる。また、前庭部に覆屋の存在を想定させる柱穴を検出したことは重要であろう。

2次窯焼成部の上方右側床面に到立して出土した土師器甕は、本窯との関係は不明であるが、窯体が埋没する前に搬入されたことはまちがいはなく、焼成部中央右の側壁及び、この甕の上方の床が溝状に欠失していたことと無関係ではないように思われる。

本古窯跡の年代については、出土遺物などにより700年前後を当てているが、年代決定は詳細な調査、整理をまって検討したい。

また、1号窯の南側に並行して構築されていたカマド状遺構も、本窯と同時期のものと思われるが、その性格についても今後の検討を待ちたい。

（宮下幸夫）

図版 I

調　査　前

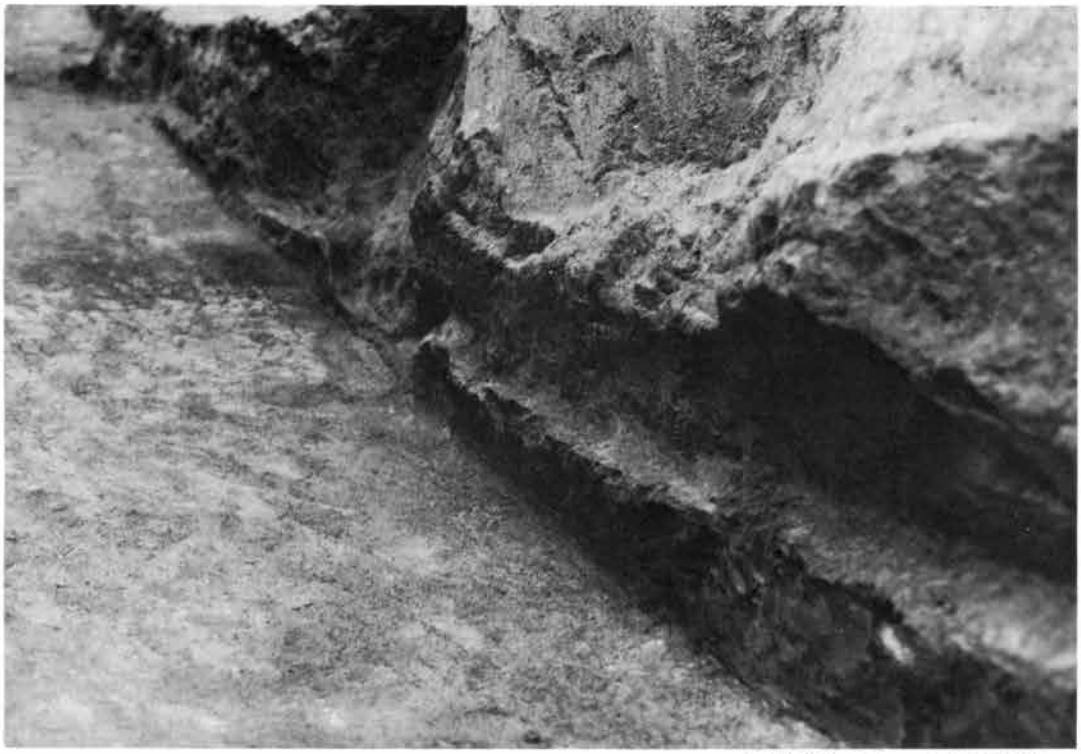
調査後全景

図版 II

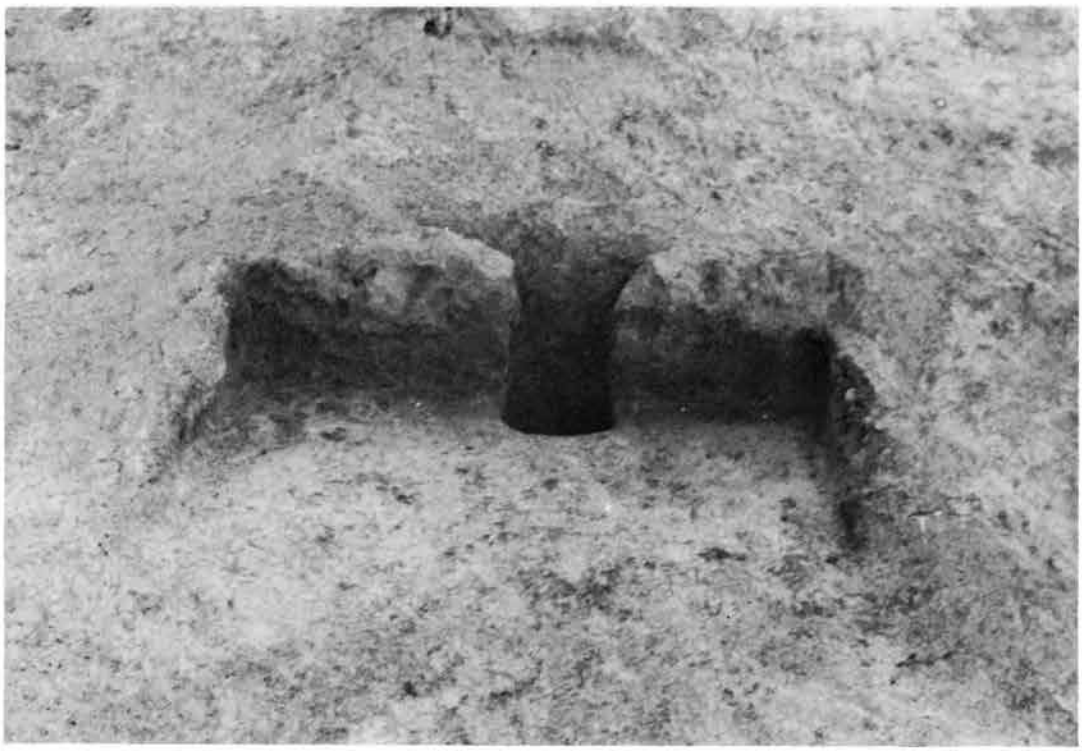
1号窯2次床（最終床）

同焚口部状態

図版Ⅲ



焼成室右１次・２次床状態



カマド状遺構

図版Ⅳ

焼成室土師甕出土状態

窯体南側遺物出土状態

図版V

1

2

3

4

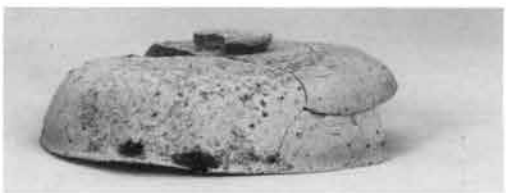
5

6

7

8

9

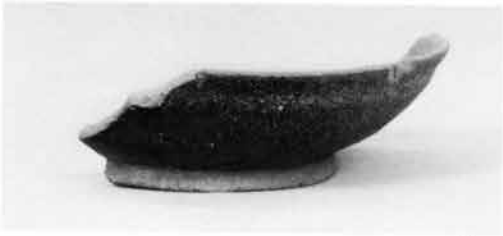


10

11

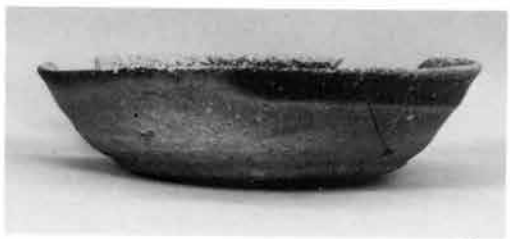
12

13



14

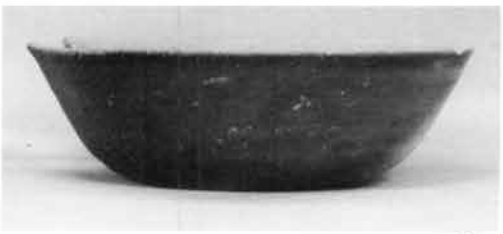
15



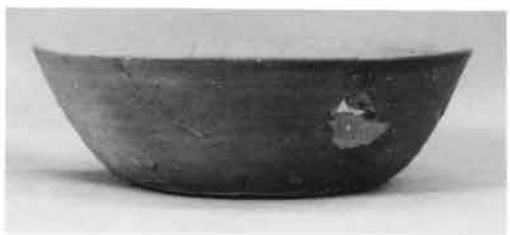
16

17

18



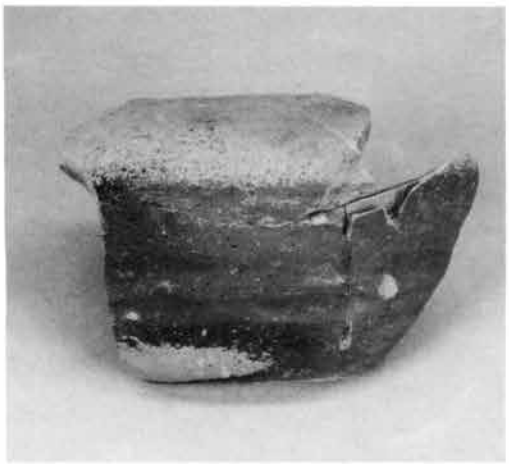
19



20

図版Ⅶ

21



22

23

24

25

26

27

28

小松市那谷町桃の木山1号窯

県営公害防除（カドミ）特別土地改良事業
に係る緊急発掘調査概報

昭和54年3月20日　印　刷
昭和54年3月30日　発　行

発行所　　石川県教育委員会
印刷所　　㈱　橋本確文堂